

# ひだまり

第15版  
平成30年4月  
公立八鹿病院 緩和ケア病棟



花の便りもあちこちで聞かれる时候になってきました。皆さんはどのように春を過ごされますか。緩和ケア病棟でも庭園の花が咲き始め新芽が出てきています。ホッと優しい気持ちになる日々です。今年度号は、緩和ケアのこと、病棟について紹介をしていきたいと考えています。

みなさんにお尋ねします。



「緩和ケア」と聞いたら  
どのようにイメージをしますか。

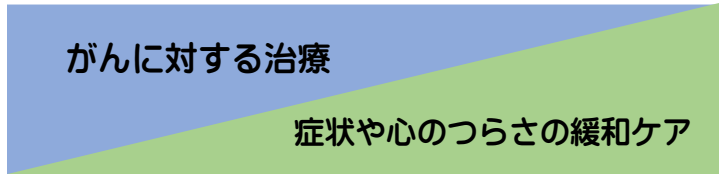
がんの経過



A



B



Aは、従来の考え方です。Bの考え方も広まりつつありますが、まだまだAの考え方が多いのも現状です。緩和ケアはがん治療の最後の場でなく、がんと診断された時から、がんの治療の開始と共にスタートしていきたいと考えています。治療をしながら、どのように過ごしたいかを一緒に考えます。がん患者さん、ご家族の支えとなれるように痛みなどからの辛さだけでなく、不安や心の辛さを緩和できることを目指しています。緩和ケアチームが中心となり他職種と連携しながら、患者さんの「その人らしく」を大切に日々の生活を送る上での相談をさせていただいています。



## 緩和ケア病棟：岸本弘之医師より

八鹿に来て5回目の春を迎えました。寒くて辛い季節を堪えて桜が一気に咲き、茶色だった樹々が黄緑色に染まり始め、しだいに緑が濃くなっていくこの時期が好きです。

暖かな陽差しを浴びると自然に笑顔がこぼれます。人間は大自然の営みや時間の流れに逆らうことはできません。素直に、前向きに付き合うのがいいと思います。私たちは緩和ケアを通して、がんの痛みに堪えながら、さまざまな悩みに苦しんでおられる患者さんに、真摯に誠意を持って接していきたいと考えています。これからどうかよろしくお願いいたします。



## 緩和ケア病棟：山下和恵師長より

超少子高齢化はますます進み医療経済や患者さんご家族を取り巻く環境の変化などにより、看護も多様で柔軟な対応が必要とされています。

しかし、どのような情勢や時代になっても、変わらないのは看護の本質です。ナイチンゲールがろうそくを手に、いたわり励ました時代と、“大切な命に寄りそう看護”は看護師として働く誰もが、心の幹として持っているものだと思います。

24時間・365日と患者さんの一番近くにいる私たちですから、患者さんご家族様のお気持ちを尊重し、優しく思いやりのある看護をいたします。よろしくお願いいたします。



## ボランティアの紹介～絵手紙教室～

ボランティアの方の協力を得て、3月27日に絵手紙教室を行いました。筆や墨・絵の具を使い、木蓮の花をハガキ一杯に描きました。筆を持ち描くことがない患者さんも始めは緊張されていましたが「おもしろかった。」「また書いてみたい。」など言ってくださり、実りある会になりました。



描いた絵はがきは同じものではなく、世界に一枚だけの絵はがきです。ご自分で書かれた絵はがきを友人に送った方もいました。今後も、患者さんご家族の希望を聞きながら「生きること」に寄り添いたいと思います。

## ～編集後記～



この春より緩和ケア病棟にお世話になります。どの部署でも患者さんに寄り添って、その思いを聞くことが重要であり、そこから看護がはじまります。基本的な事ですがとても大事なことです。私たちは「患者に寄り添う看護」を目指しています。いろいろなお話を聞かせてください。 文責：山下